

現在の横田基地を旧日本陸軍が多摩飛行場として使用した第二次世界大戦の時代、米軍が終戦後占領していた時代、朝鮮戦争、ベトナム紛争、そして前章で述べた関東計画(KPCP)の大建設ブームの時代などは、その後の1980年代から現代に至る静かで安定した時代に比べるとなんと目まぐるしい時代であったことか。

関東計画(KPCP)以降1980年代から90年代にかけても基盤施設の改良工事は更に続き、第二次世界大戦時代から残っていた多くの木造建築物が次々と鉄筋コンクリート造りの建物に建て替えられました。一連の近代化工事で今日見られるような横田独特の風景が形作られたのです。(訳注:KPCP以降の日本政府の予算による施設整備計画はJapanese Facility Improvement Program(JFIP)と呼ばれ、基地内の施設、建物の近代化が強力に推し進められた。一見KPCPの延長のように見えるが、KPCPは関東地方に散在していた基地施設の整理統合を目的とした工事であったのに対し、JFIPはその名の通り従来から横田基地にあった施設の近代化工事である。どちらも日本政府予算による工事であり日本政府が切れ目のない予算配分を続けてきたことに留意されたい。)



1992年9月撮影。旧運用群の建物。帝国陸軍航空審査部の建物であり、2001年3月に解体された。本来は木造、一部3階建ての建物であったが戦後米軍が2階建てに改装した。

JFIP関連工事により、1990年代だけでも航空団司令部、使命支援群、整備群の建物、西地区高層住宅、南、北、西地区の低層住宅、兵員宿舎、サムライカフェ(兵員食堂)などが建設され、駐機場の拡大再整備などの大型案件も遂行されました。そして福生ゲートから新しい航空団司令部の建物正面へ直接つながるS字状の大通り「フレンドシップ・ブルバード」も新しいコミュニティープランのもとに建設されました。



2002年春。新しいベース・オペレーションの前で工事が進む日本庭園。「DVガーデン」と呼ばれる横田を訪れるVIPはここで横田スタッフの出迎えを受ける。

一連の建設事業の終盤の2000年代には、メリーランド大学、横田コミュニティー・センター(YCC)、ベースオペレーションの建物が建設され、南



2001年5月31日撮影。フレンドシップ・ブルバードの中央に建てられた「友達の像」の除幕式。

北2期の工事に分けられた滑走路舗装の打ち替え、そしてフライトラインの日本庭園もこの時期に全面改装されました。日米友好を祈念する「友達の像」がフレンドシップ・ブルバードに設置されたのもこの頃です。

1970年代以降、あまり変化が見られなかったのは航空機の運用任務で、C-130による戦術輸送任務とUH-1ヘリコプターによる任務は今日まで変わらず続いています。1989年10月1日、軍事空輸軍団(当時のMACで、現在のAMC)所属の第374戦術空輸航空団が第475基地航空団のテナントとしてフィリピンクラーク基地から移動してきました。この部隊には2つのC-130飛行隊と1つのC-9ナイチンゲール患者輸送機の部隊が含まれていました。C-9による患者輸送のミッションは2003年9月まで続きました。



2003年9月14日、最後のC-9ナイチンゲール患者輸送機が任務を解かれて横田を離れた。

C-21小型ジェット輸送機は、近隣の基地への要人輸送などの任務のために、1985年から2007年まで使用されましたが、その後C-12小型輸送機と交代して現在に至っています。軍事空輸軍団の戦略航空輸送任務も、ベトナム紛争以来今日まで変わらず維持されています。第374戦術空輸航空団は改編され、横田基地を本拠地とする現在の第374空輸航空団(基地航空団)になり、太平洋航空軍団(PACAF)と第5空軍(5AF)の指揮下に置かれました。第475基地航空団は任務を解かれ、人員機材は第374空輸航空団に引き継がれました。(訳注:これはひとつの基地にひとつの航空団というコンセプトによるものです。)

基地の歴史を通して、横田の住民は地元社会で積極的な活動をしてきましたが、横田に対する地元からの関心も高まり、1980年代から90年代にかけては、そのピークに達しました。それは毎年2日間にわたって地元住民に基地を公開する「フレンドシップ・フェスティバル」に最も顕著に現われました。基地の広報部は1986年には50万人、87年には60万人もの人々が基地を訪れ、航空機を身近に触れたり、アメリカンカルチャーを楽しんだと発表しました。「フレンドシップ・フェスティバル」は1970年代終わりまでにはその形が確立され、今日に至るまで伝統的なイベントとして定着しています。



1991年9月1日撮影。横田基地恒例のフレンドシップフェスティバルを楽しむ沢山の山の人々。

その一方で、横田基地は東京都が毎年秋に行う総合防災訓練にも積極的に参加をしています。2009年に初めて参加した時はUH-1Nヘリコプターが支援物資搬送の任務を担当しました。



恒例の東京都による総合防災訓練で、東京消防庁のスーパービューマ・ヘリコプターに乗り込む都職員。

9.11テロ攻撃以来、横田基地とその兵員はアフガニスタンにおける「不朽の自由作戦」、フィリピンにおける「不朽の自由作戦」、「イラクの自由作戦」、「イラクの新しい希望作戦」などの任務に従事してきました。C-130やC-12を、その乗員と共に派遣しましたが、時には人員だけを派遣することもありました。第374空輸航空団は日本に基地を置くにも関わらず、このような21世紀の主要な作戦にフルに参加してきました。

横田基地の部隊は人道支援にも参加しており、長い視点で顧みると、オペレーション・シー・エンジェル(巨大サイクロンにより甚大な被害を被ったバングラディッシュに対する災害救援活動、1991)、オペレーション・フェアリー・ビジル(フィリピンのピナツボ火山が噴火した際米軍人、軍属をフィリピン、クラーク空軍基地やスービック海軍基地から救出した災害救援活動、1991)、インド洋統合津波救援活動(2004-05)、ビルマ(ミャンマー)でのサイクロン被災地支援事業(2008)、フィリピン・ダマヤン支援作戦(台風災害救援活動、2013)など多数の支援活動に参加しました。

横田基地第374空輸航空団にとって最も顕著な出来事は、2011年3月11日に発生した東日本大震災と、それに伴って発生した大津波と原子力発電所の災害に対処するため、救援活動の中心となって「トモダチ作戦」を実行したことです。この作戦には、地震発生

の当日、成田空港などに着陸できず、目的地変更で緊急に横田へ着陸した11機の民間旅客機の受け入れ支援、(最初の機体は地震発生1時間足らずで横田に着陸して来た)、震災復興支援のために投入された数百人の派遣要員と航空機の収容、被災した福島第一原子力発電所で原子炉緊急冷却対策の試みに使用するための大型消防車の提供、航空機による幾多の軍事支援、人道支援、そして米国エネルギー省による空と地上からの放射線量測定作業の支援などが含まれていました。



2011年3月12日撮影。東日本大震災により成田空港などに着陸できなくなった旅客機が横田基地に着陸、乗客は太陽レクリエーションセンターなどに収容された。11機の民間旅客機の飛来が第374空輸航空団の「トモダチ作戦」の始まりだった。

1980年代以降の横田基地の歴史の中でもう一つの重要な出来事は、2012年3月、航空自衛隊航空総隊司令部が横田基地で運用を開始したことです。それは第二次世界大戦が終わって以来、初めて日本の防衛施設が横田基地に設置されるという新たな歴史の幕開けでした。総隊司令部移動に伴い大規模な建設事業が行われ、同司令部庁舎の他、通信施設、将官宿舎、隊員宿舎、講堂/厚生施設、倉庫などの自衛隊関連施設が建設されました。建設用地を確保するため、ウイルクス野球場、古い託児所や新任下士官教育施設等が取り壊され、新たに立体駐車場、託児所、保冷倉庫、第5ゲートとその付帯設備、新任下士官教育施設、運動施設その他多数の建物、施設が建て替え、整備されました。

JFIP関連の工事も同時に進行し、管制塔と航空管制業務棟、消防署等が完成しました。航空機地上支援機材整備施設の建設のために第二次大戦以来使用されてきた古い格納庫も取り壊しの対象となりました。(訳注:歴史的に重要な建物は取り壊す前に地元の福生市教育委員会から調査協力を得た。)福生ゲート脇のショペットとガソリンスタンド、レストラン「チリーズ」も21世紀に入ってから米軍予算で完成しました。

横田基地の長い歴史は、1940年に始まりました。最初は帝国日本陸軍の飛行場として、その後米軍の基地として使用され、その間大小さまざまな出来事がありました。横田基地の軍人、軍属、日本人従業員、そしてその家族は数十年にわたり、基地の外にも影響を及ぼす幾多の重要な出来事を目撃し、また自らも当事者となってきました。ごく平凡に見える日常の出来事から大きな施設建設までもすべてが横田基地の歴史の一部であったのです。そして歴史は今も刻み続けられています。私が第374空輸航空団の史料部長として過去6年半の間に学んだことは、毎日のその瞬間が横田基地にとって歴史の1ページに値するかもしれないということです。

訳者あとがき:

私はCESの環境事務所に籍を置いています。仕事の一つに横田の歴史文化資源管理があり、その関連でドライバー氏が任中は常に連絡を取り合っていました。原文のYokota Historyは横田基地史料部長としての彼の仕事の集大成としてまとめられたものです。史料部に保存された膨大な情報を整理し、再構成していく作業の困難さは想像以上のものであったでしょう。ひたすら敬意を表するものです。日本語訳は今年で終戦と米軍進駐70周年を迎え、広報部の黒杭さんからそれを記念する企画としてご提案があり、お受けしました。翻訳は情報源の偏りに起因すると思われる、一般に理解された歴史記録との相違を吟味しながら進めました。短時間で仕上げるため、調べが行き届かなかったと後悔する部分もまだありますがすべて訳者本人の責任です。多くの方々に助言や資料提供、励ましをいただきました。ことを感謝いたします。(CES:山口美隆)

Yokota Air Base History